

## 概念化を再考する — 認知科学的知見の積極的導入 —

言語が人間の精神活動の重要な一部であることは言うまでもない。我々は日常の知覚経験を基本的な認知能力を用いていわば構造化し、その構造化された概念を用いて現象を理解しているわけであり、そうした概念が語や事態の意味を記述・理解する場合に重要な働きをするのである。Langacker の提唱する認知文法が説得力を有しているのは、認知操作を知覚作用を抽象化した相似物であるとし、意味を概念化と規定して、人間が固有に有している基本的な認知能力を活性化してその取り巻く世界を一定の仕方で切り分け、解釈(construe)する認知プロセス(概念操作)の視点から言語現象を捉えて記述しているからであると言ってよい。

本ワークショップでは認知文法の言語観を理解する上で重要な人間の知覚と認識のメカニズムを明らかにし、このことを踏まえて、認知文法では意味を概念化と規定することから、概念世界における認知の在り様や認知発達について考察し、認知に根ざした言語記述の本質とはどういうことかについて議論する予定である。各発表の要旨は以下の通りである。

### ① 人間の事態把握における知覚・認識と言語化のメカニズム

認知文法の言語観は知覚作用を基盤とした知覚作用と概念操作の並行性であり、このことは Langacker (2008)で認知主体の概念操作を知覚者が知覚対象をどのように知覚するのかということに対応させて論じていることにも現れている。ここで重要なことは Langacker (1995)が‘viewing’を知覚と認識の両用に用いそれぞれを図示して論じているが、この知覚作用においてもそれと同時並行的に認識がなされているということであり、それを示した図は知覚と認識が不可分の事態認識を表していることである。とすると、それに対応する認識作用の図は知覚・認識から認識を分離して示したものであり、これは認知文法では「言語の意味を概念化」と規定することから意味の記述は認知主体の認知プロセスを記述することであるからだと考えると納得がいく。本発表では Basalou and Prinz (1997)等の認知科学の見地から人間の知覚と認識の関係についてそのメカニズムを明らかにし、知覚と認識の融合とその分離(メタ認知)という人間の認識作用の 2 つの局面がどのように言語の表出と関わっているのかを論じる。

### ② 人間の認知能力からみた概念化の世界観の再考

第二発表では、人間固有の認知能力からみた概念化の世界観を認知文法の観点から再考することを主たる目的とする。認知文法では認知の営みを重視し、人間に実在する認知能力という観点から言語記述しているという点で理論的「自然さ(naturalness)」を満たしているということは言うまでもない(cf. 野村 2014・Langacker 1990: 343)。特に最近の Langacker (2008, pt. IV)の Frontier(最前線)という章では、認知科学に基づく概念により言語記述を試みている箇所が見受けられる。中でも「身体性(embodiment)に基づく外界直接認知(Engaged Cognition)」や「外界間接認知(Disengaged Cognition)」という新しい概念が導入されているが、本発表では、こうした認知様式も散発的かつ唐突に提出された概念ではなく、認知的実在性に基づいた汎用性のある自然な道具立てであることを考察する。具体的にはこれらの概念のダイナミックなプロセスの背後には原始的場面からの切り出しという認知能力に基づき、最近の認知科学・脳科学の成果であるシミュレーションの形成や特にミラーニューロンの活性化(cf. Rizzolatti and Sinigaglia 2008・Iacoboni 2008)という人間の基本的認知現象によって裏付けられることを論じる。

### ③ グラウンディング要素と *across* 文の認知構造：概念化の本質的側面

認知文法理論におけるグラウンド要素(G要素)には、定冠詞 *the* に代表される決定詞と、定型節を特

徴づける時制や法助動詞がある。本発表では、G要素としての法助動詞の意味構造と、主観性を論じる際にいつも引き合いに出され(「ラネカーの迷走」とも言われる *Vanessa is sitting across the table (from me)*)に代表されるような *across* 文の意味構造について、ラネカーとの議論も紹介しながら、両者を詳細に比較対照し、基本的な共通点と差異を示す。まず G要素では、グラウンド化される要素(名詞や動詞)のみがプロファイルされ、Gとそのプロファイルとの関係(grounding relation, G関係)はプロファイルされない。つまり、GとG関係は、IS(immediate scope)の外(=offstage)にあり、MS(maximal scope)の内側にある(グラウンド化される名詞や動詞の意味のみが onstage にある)。例えば *I guess* と G要素 *may* とは、同じような意味を表しているようだが、認知プロセスが異なる。G(この場合話し手)とG関係(話し手が命題 P を推測しているということ)が、*I guess* では onstage にあり、G要素の *may* では offstage にあるという点で決定的に異なる。一方 *across* 文では、*from me* がある場合もない場合も、参照点 R が導入され、特に *from me* がない場合、R と G とが一致する(*coincide*, p.c. Langacker 2013/12/31)。つまり *from me* のない *across* 構文では、Gのみが offstage にあり、G関係は onstage にありプロファイルされる。*from me* のない *across* 文と G要素との認知構造の差異は、上記発表①②で論じられる「メタ認知」と「切り出し」という側面が、概念化に深く関与していることを示唆する。

#### <主要参考文献>

- Barsalou, Lawrence W. and Prinz, Jesse J. 1997. "Mundane creativity in perceptual symbol systems." In: Thomas B. Ward, Steven M. Smith, and Jyotsna, David (eds.) *Creative thought: An investigation of conceptual structures and processes*, 267-307. Washington, DC, US: American Psychological Association.
- Barsalou, Lawrence W. 1999. "Preceptual Symbol Systems." *Behavioral and Brain Science* 22: 577-660.
- Iacoboni, Marco. 2008. *Mirroring People: The Science of Empathy and How We Connect with Others*. New York: Picador.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Viewing in Cognition and Grammar." In: Philip W. Davis (ed.) *Alternative Linguistics: Descriptive and Theoretical Modes*, 153-212. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 野村益寛. 2014. 「認知文法の思考法: FCG1, Ch.1 を読む」『北海道大学文学研究科紀要』第 142 号. 33-62.
- Rizzolatti, Giacomo and Corrado Sinigaglia 2008. *Mirrors in the Brain: How Our Minds Share Actions and Emotions*. [English Translation.] New York: Oxford University Press.